



# 北陸街道 木ノ芽峠

## 京と越前が出会った峠道

人が住めば道ができます。家から家へ、集落から集落へと、人や物の動きが活発になるとともに道も成長してきました。こうして人々の生活を支え、地域の産業を育ててきた道も、あるいは、長い時のうつろいの中で、その役目を終えることもあります。先人のさまざまな人間ドラマの跡を残す歴史街道は、いま、役目を終えた道として静かなまどろみの時を迎えています。



言奈地蔵



道元禅師碑

## 権六の最期を みとつけた峠の地蔵

### 言奈地蔵のいわれ

このお地蔵さまは弘法大師であるという。昔、大金を所持した株人を乗せて、この峠を越えた馬子があった。馬子はその株人を殺して金を奪ったところ、地蔵の面前であったことに気づき「地蔵言うな」とひとり言を言った。すると地蔵は「地蔵は言わぬがおのれ言うな」と言返された、感さわまって改心し善人に立ちかえた。その後、年を経て再びこの峠を越えたとき、年若い株人と道連れとなり、よもやま話をして地蔵の前に来た。馬子は霊験あらたかな地蔵であることを告げると、株人はそのいわれを問うた。馬子は先年の悪事を語り、あり次第を告げた。この株人こそ先年殺された株人の息子で、親のかたきを尋ね歩いたのである。息子は天にも昇る心地がしたが、このような山中でかたきを討つよりは、共に教習まで出でから、名乗りをあげて、これを討ちとったことである。

この昔噺の舞台となっているのが「木ノ芽峠」で、古代・中世には京～越前間を往来する人や馬でたいへん賑わったという峠です。そして権六に「我れ言うなよ」と言った地蔵さまは弘法大師の作と伝えられる「言奈地蔵」で、いまも静かに峠を見守っています。

## 玄関口が実は 最大の難所だった

越前・若狭の国は海産物や農作物に恵まれた豊かな地であり、また、大陸との玄関口にもなっていたので、京の都にとってはたいへん重要な地域でした。そのため、京と越前・若狭を結ぶルートは時代によっていろいろ開発されてきました。最古の道は中山峠を越えていましたが、古代・中世になると木ノ芽峠越えの北陸街道がメインルートになります。琵琶湖の西岸を通る西近江道を北上すると道ノ口宿から街道は大きく2つに分かれ、西へ行く道をとれば敦賀へ、そのまま北上すると木ノ芽峠を越えて今庄宿(福井県

木ノ芽峠石碑



今庄町)に到着します。木ノ芽峠は越前への玄関口ともいべき位置にありましたが、この玄関口こそ街道一の難所であり、今庄側の急斜面には人馬ともにワラジを履きかえて険しい峠越えにそなえたという「沓掛場」とか、風雪に笠を取られたという「笠取り峠」などという、苦難をしのばせる名称が残っています。古代・中世、メインルートとして賑わった北陸街道でしたが、近世になって橋ノ木峠越えルートが開発されると、東近江道から東海道・中山道に接続するこの新道に主役の座を譲ることにになりました。

## 峠に響いた ヒーローたちの足音

この峠を越えた歴史のヒーロー、ヒロインも数知れません。木曾義仲、源義経、織田信長、柴田勝家といった戦国武将が勇壮に駆け抜け、また古くは平安中期の大文豪紫式部が、越前守となって任地におもむく父藤原為時とともにこの木ノ芽峠を越えたといわれます。峠といえば茶屋がつきものですが、木ノ芽峠の茶屋は当時のたたずまいのままに今も残っています。この茶屋の前に建っているのが鎌倉時代の高僧道元禅師の碑。道元は越前の地に永平寺を創建するためにこの峠を越えました。のちに病を得て京に戻るとき、ここで弟子たちとの別れを惜しんで詠んだ歌が碑には刻まれています。  
「草の葉にこだでせるみの木の芽山  
雲にみちある心地こそすれ」

## 険しい山を揺りかごに、 静かに眠る史跡たち

京～越前間の最大の難所であった木ノ芽峠は周囲を険しい山に囲まれていたため、付近には多くの史跡が驚くほど当時の面影のままに残っています。前述の言奈地蔵、道元禅師碑のほか、前川家茶屋、木ノ芽城址、鉢伏城址、観音寺丸城址、西光寺丸城址があり、なかでも西光寺丸城址は破壊されず原型をとどめているということで、全国的にもきわめて珍しい例となっています。これらの城は、一向一揆が盛んにおきた頃、一揆軍の居城として使われました。峠を今庄側に降ったところに首切り谷というのがありますが、一揆軍はここで首を切られたということです。





文政の道しるべ

峠には、京～越前間のメインルートとしての栄華を偲ばせる石畳が3ヵ所に残されています。京都側斜面に約30メートル、頂上付近に約40メートル、今庄側沓掛場付近に約20メートルにわたって敷かれた石畳は、旅人の頻繁な往来と長年の風雪に耐え抜いて、いまではすっかり丸みを帯びたおだやかな表情を見せています。

## 歴史の殻を脱ぎ、 新たな一歩へ踏みだした街道の街

### 壮観！ 大名行列も泊まった今庄宿

山中峠、木ノ芽峠、橋ノ木峠のいずれの道を選んでも、江戸・京から南越の山を越えて最初に泊まる宿場は今庄でした。京・江戸へ向かう人が準備のために泊まったのも今庄です。今庄は、江戸時代に最も繁栄した宿場町でした。今庄宿は、関ヶ原の戦いのち越前国主となった結城秀康が北陸道を整備したとき、重要な宿駅として計画的に整備したもので、日野川沿いの街道には明治維新まで、本陣および50戸の旅籠のほかに茶屋、酒屋、馬借などさまざまな業種が

軒を並べていたといえます。加賀・越前両藩の参勤交代や大名の旅行の折には、本陣・脇本陣を置く宿場として今庄宿の賑わいはたいへんなものでした。しかしその反面苦勞も多く、1833年の鯖江藩主の参勤交代の折には荷物運搬のため、今庄から30キロも離れた越前海岸の村々にまで応援が求められたと記録に残っています。ところで、奥の細道の旅で北陸道を通った芭蕉も、一旅人として今庄に一泊したらしく、木曾義仲の古戦場として名高い燧ヶ城址には、そのとき芭蕉が詠んだ「義仲の寝覚めの山か 月悲し」の句碑が建てられています。

板取宿



木ノ芽峠茶屋



敦賀湾



田北陸トンネル



今庄そば道場



### 今庄はいま、 村おこし真っ最中

明治5年、近世の宿駅制が廃止されて以来、今庄町の盛衰が始まりました。明治19年の国道変更により、今庄を通っていた国道は降格され、街は急激に衰退に向かいますが、明治29年、北陸線の一部開通のおかげで、今庄は鉄道の街として再び往年の活気を取り戻します。ところが昭和36年、南越の連山を貫通する北陸トンネルが完成すると、今庄駅は特急・急行の通過駅となり、以来再び衰退の運命

をたどることになりました。こうして交通集落としての機能を失った今庄町は、いま心機一転、豊かな自然と歴史遺産をもとで、関西のリゾートゾーンとして若々しくよみがえろうとしています。開発中の今庄365スキー場はまもなくオープンするでしょう。また、名産として名高い今庄そばも、作る楽しみ、食べる楽しみを味わえるソバ道場を開設したことでイメージをリフレッシュしました。東京からはるばるそばを食べにくる人もいるほど、ソバ道場ファンも増えてきています。自然と史跡とグルメの里・今庄町は、いま「村おこし」真っ最中です！